

2018 年度
TSUNAGU プロジェクト
年間報告書



■目次

TSUNAGU プロジェクト	1
----------------	---

☆「駅プロジェクト」

駅① 鈴鹿市コミュニティバス C-BUS 利用促進事業	3
駅② 伊勢鉄道 グッズ制作事業	4
駅③ 伊勢鉄道 中瀬古駅舎&車両有効活用事業	5
駅④ 御浜町道の駅パーク七里御浜 特産品開発&献立開発	6
駅⑤ 紀宝町ウミガメ公園 店舗活性化事業	7
駅⑥ 紀宝町ウミガメ公園 献立開発	8
駅⑦ ネコギギプロジェクト	9
駅⑧ 鈴鹿抹茶ブランド化事業	10
駅⑨ 観光プロモーション動画事業	11
駅⑩ 学生によるウェブマガジン事業～to me motto!～	12
駅⑪ インバウンド対応（翻訳事業など）	13
駅⑫ 高大接続事業	14

☆「つなぐ育ちプロジェクト」

育ち① すずたん広場	15
育ち② すずたん広場～ブラジルと日本の親子のおはなしと遊びの会	17
育ち③ すずかだいがく こどもひろば	18
育ち④ 大学アスリートへの栄養教育	19
育ち⑤ ジュニアアスリートへの栄養&ケガの予防教育	20
育ち⑥ 性教育出前授業	21
育ち⑦ いのちの教育人形劇「しあわせの種」上演	22
育ち⑧ つなぐ育ち事例勉強会～発達～	23
育ち⑨ つなぐ育ち事例勉強会～救急処置～	24
育ち⑩ 亀山市教育委員会などとの連携事業～つなぐ育ち研修会～	25

執筆者一覧

■活動の目的と経緯

学校法人享栄学園の建学の精神は「誠実で信頼される人に」です。創立者の堀榮二は、自らが研鑽した米国式商業教育や商業実践の場として建設した享栄百貨店での実務に当たらせるなどの「実社会に役立つ教育」をすることで、社会に出て直ぐに間に合う誠実で信頼される人を養成することを大切にしてきました。また、当時では珍しい数週間の海外修学旅行を行うことで「世界的視野」を広げ、進取実践や貿易立国を生徒に説き、日本を愛し、日本の文化・歴史を大事にしてきました。

このような創立者の思いや建学の精神をもとに、「つなぐひとになる」というテーマを設け、建学時より続く国際的視野を育む教育によって、あらゆる問題を抱える地域社会を未来とつなぐ人材を育て、大学の伝統や精神をつないでいくことを目的として、TSUNAGU プロジェクトを立ち上げました。

学校法人享栄学園は、鈴鹿大学と鈴鹿大学短期大学部からなる高等教育機関を有しています。鈴鹿大学には国際地域学部（2019年度から国際人間科学部を発展的改組）とこども教育学部、鈴鹿大学短期大学部には生活コミュニケーション学科があります。国際地域学部国際地域学科には、国際コース、地域コース、ビジネスコース、こども教育学部こども教育学科には、養護教育学専攻、幼児教育学専攻、短期大学部生活コミュニケーション学科には、こども学専攻、食物栄養学専攻があります。

TSUNAGU プロジェクトは、各学部・学科の強みや特色を生かしながら、学園全体で取り組むプロジェクトです。学生が主体的に参加し、「何を学び、どのような力を身に付けることができたか」が実感できる取り組みを行っています。また、これらの取り組みを教育・研究につなげ、大学が学んだ成果を地域に発信し・還元することを目指しています。

TSUNAGU プロジェクトには、2つのプロジェクトがあります。1つめは「駅プロジェクト」で、“地域の駅”である「公共交通」や「道の駅」などの活性化とインバウンド振興という地域課題に取り組むことで、地域創生を援助する事業です。2つめは「つなぐ育ちプロジェクト」で、生まれてから就労するまで(0～22歳)の育ちの支援を行い、こどもが自らの力で育つことを援助する事業です。

現在、我が国は少子高齢化という問題に直面しています。TSUNAGU プロジェクトの背景には、日本のどこに住んでいても「個人の価値観を尊重する生活環境を提供できる社会」を実現し、またそれらの環境を自ら作り出す人材の育成が求められているという現状があります。地方創生が実現すべき社会は、生まれ育った地域で、個人の価値観を尊重して生活し、その地域を豊かなものにしていくための継続的な営みができる社会の実現だといわれています（2018.11.26 中央教育審議会）。

このような社会を実現するために、TSUNAGU プロジェクトが貢献できればと考えていますし、また、外国籍の親を持つ外国人学生や留学生、さらに年代の違う社会人学生が多く在籍する本学園の多文化共生キャンパスだからこそ、社会が抱える課題と誠実に向き合うことができるのではないかと自負しています。

私たちが住む地域は「世界」とつながっています。だからこそこれからのグローバル化には、地域発の取り組みが必要になってきます。私たちが地域で活動している取り組みを「世界」に発信し、グローバルレベルで地域課題を考えていくことが求められています。性別に年齢、国籍、考え方や価値観など、人それぞれが持つ違いのすべてを尊重しながら具体的なアクションを起こしていきます。

■活動内容と実績

「駅プロジェクト」と「つなぐ育ちプロジェクト」に分けて、活動内容を紹介します。詳細については、次ページからの各事業の報告をご覧ください。

☆「駅プロジェクト」

- 駅① 鈴鹿市コミュニティバス C-BUS 利用促進事業
- 駅② 伊勢鉄道 グッズ制作事業
- 駅③ 伊勢鉄道 中瀬古駅舎&車両有効活用事業（オープンキャンパス&ちょこっとコンサート）
- 駅④ 御浜町道の駅パーク七里御浜 特産品開発&献立開発
- 駅⑤ 紀宝町ウミガメ公園 店舗活性化事業
- 駅⑥ 紀宝町ウミガメ公園 献立開発（亀巻き寿司ほか）
- 駅⑦ ネコギギプロジェクト
- 駅⑧ 鈴鹿抹茶ブランド化事業
- 駅⑨ プロモーション動画事業
- 駅⑩ 学生によるウェブマガジン事業～to me motto!～
- 駅⑪ インバウンド対応（チラシ翻訳など）
- 駅⑫ 高大接続事業（駅プロジェクトを題材にした高校生への模擬授業など）

☆「つなぐ育ちプロジェクト」

- 育ち① すずたん広場
- 育ち② すずたん広場～ブラジルと日本の親子のおはなしと遊びの会
- 育ち③ すずかだいがく こどもひろば
- 育ち④ 大学アスリートへの栄養教育
- 育ち⑤ ジュニアアスリートへの栄養&ケガの予防教育
- 育ち⑥ 性教育出前授業
- 育ち⑦ いのちの教育人形劇「しあわせの種」上演
- 育ち⑧ つなぐ育ち事例勉強会～発達～
- 育ち⑨ つなぐ育ち事例勉強会～救急処置～
- 育ち⑩ 亀山市教育委員会などとの連携事業～つなぐ育ち研修会～

■今後の計画

2020年度入試からは、総合型選抜「TSUNAGU プロジェクト型」（全学部共通）入試を導入します。これにより、新学習指導要領の主体的・対話的で深い学びに対応できるような高大接続の事業を進め、高等学校から大学への学びの連続性を確保できるような取り組みを進めていきます。

また、自治体や企業との結びつきを強め、他業種の方との関係性の中で、学生たちが育つ環境を作っていきたいと考えています。

■担当者

担 当 こども教育学部 仲 律子（TSUNAGU プロジェクトリーダー）

連絡先 メール naka@m.suzuka-iu.ac.jp

駅① 鈴鹿市コミュニティバス C-BUS 利用促進事業

■活動の目的と経緯

鈴鹿市のコミュニティバス「C-BUS」は現在、利用者数が大きく減っており、年間1億円の税支出に対し、路線維持のための市民の理解と利用を促していく必要があります。

鈴鹿大学の学生も、便数の少ないスクールバスだけでなく、C-BUSを有効活用することにより、通学や放課後の余暇活動なども便利になります。

このように、公共交通の分野は「ニーズ調査」「利害調整」「プロモーション」といった、地域やビジネスの学びにも役立つ身近な学習素材・社会課題です。鈴鹿市と本学は「学官連携協議会」による事業協力を推進していることから、鈴鹿市長・末松則子氏からの多大なる期待を受けて、C-BUS活性化事業に着手することになりました。

■活動内容と実績

C-BUS担当課である都市計画課の皆さまには、ゼミや講義の場にお越しいただき、C-BUSの厳しい現状をお話しいただきました。これを受けて、高見ゼミを中心に設立した「大学発ベンチャー株式会社鈴りん探偵舎」の学生たちが、以下のような利用者拡大のための方策を企画・実践しました。

- ①1年生必修講義「鈴鹿学」にて学生にC-BUSの現状と便利さについて説明・PR【約200名】
- ②C-BUS利用促進ポスター&チラシの制作および学内・近隣への掲示・配付【約50部】
- ③C-BUSチラシ【翻訳版】の制作と留学生への配布説明【約200名】
- ④夏休みこども公開講座にて「C-BUSに乗ってはじめてのおつかい」を実施【親子5組】
- ⑤大学祭にて都市計画課とともに「C-BUS乗り方教室」を実施【約200名】

これらの成果をもとに鈴鹿市長に表敬訪問を行い、成果報告を行ったところ、「学生が使うダイヤに限定したポスターは斬新！」と絶賛の言葉をいただきました。引き続き学生の発想で、さまざまな行政施策のコンサルティングやプロモーション支援に関わっていきます。



■今後の計画

引き続き大学の講義や行事などと連動したC-BUSの利用促進PRを行っていくほか、新たに公式時刻表制作への参画といった、鈴鹿市行政のさまざまな交通政策にコミットメントしていく予定です。

■担当者

担当 国際人間科学部 高見啓一（株式会社鈴りん探偵舎 代表取締役）

連絡先 メール info@machi-rmc.com

駅② 伊勢鉄道 グッズ制作事業

■活動の目的と経緯

伊勢鉄道は、三重県四日市市の河原田駅から三重県津市の津駅を結ぶ鉄道です。名古屋方面から直通列車で三重県中南勢地区を結ぶ役割も担っています。1987年に国鉄伊勢線から引き継がれたのち、快速みえを新設するなどさまざまな改革を行った結果、利用者を順調に伸ばしてきました。しかし、近年では沿線の少子高齢化・人口減少やモータリゼーションが進み、将来的な課題となっています。

伊勢鉄道は「中瀬古駅」が鈴鹿大学の最寄駅となっていることから、C-BUSと同様にその有効活用や活性化が図られることにより、学生たちの通学や余暇活動などの利便性も高まっています。鈴鹿市との学官連携協議のもと、駅プロの中心テーマとして取り組むことになりました。

■活動内容と実績

鈴鹿市役所と同様に伊勢鉄道の担当者に、何度もゼミや講義の場にお越しいただき現状をお聞きしました。順調な中であって、学生利用者数は減少傾向にあり、本学にとっても身近な課題です。そのため伊勢鉄道でも子ども向けのイベントやグッズ開発に取り組んでいますが、同業他社に比べてグッズはまだまだ少ないようです。

そこでC-BUSと同様、コンサルティング技法やマーケティングを学んでいる株式会社鈴りん探偵舎の学生たちが、伊勢鉄道グッズの企画制作に取り組みました。制作に当たっては、ドライブインなどを経営する株式会社安全の全面協力をいただき、以下の子ども向けグッズを開発しました。子どもをターゲットとしたのは、将来に向けて伊勢鉄道を知ってもらい、興味・関心を持ってもらうためです。デザイン企画（Product）のほか、売価設定（Price）や販路拡大（Place、Promotion）も学生自ら考え、行いました。

伊勢鉄道グッズは、学内コンビニエンスストアのほか、御在所サービスエリア、あんぜん文化村でも購入できます。



①伊勢鉄道キーホルダー



②伊勢鉄道クッキー



③伊勢鉄道ドロップ

■今後の計画

イベント販売などでの売れ行きが順調のため、伊勢鉄道および株式会社安全と協議のうえ、新たなグッズ開発に取り組んでいく予定です。

■担当者

担 当 国際人間科学部 高見啓一（株式会社鈴りん探偵舎 代表取締役）

連絡先 メール info@machi-rmc.com

駅③ 伊勢鉄道中瀬古駅舎&車両有効活用事業

■活動の目的と経緯

伊勢鉄道は、本学の通学沿線であり、通学や通勤などで利用しています。本学の最寄り駅である中瀬古駅は無人駅であり、駅舎は現在ほとんど活用されていない状態となっていますが、生活にかかわりのある鉄道や駅は地域コミュニティの場であり、地域背景とも密接に関係しているため地域活性化に向けた魅力ある発想や活動を提案したいと考えています。

鈴鹿大学の学生のアイデアを基に、鉄道や駅を有効活用することにより、地域活性化に向けた地域の方々との交流の場になるような活動を提案しています。

そこで、伊勢鉄道株式会社の協力により、本学オープンキャンパスなどでの伊勢鉄道の車両を使ったイベント開催や、中瀬古駅の駅舎内レイアウトを行うことになりました。

実践教育のなかで有効な活用を考えるには、市民の理解と積極的な利用を促していく必要があります。

■活動内容と実績

伊勢鉄道株式会社総務部経理課と相談のうえ、活動に関する提案と方法を検討しました。本学のゼミや講義の内容から活動計画を立て実践しました（オープンキャンパス&ちょこっとコンサート）。

- ① こども教育学部2年生「こども造形の基礎Ⅰ」にて学生が伊勢鉄道のヘッドマークのデザインを制作（5月～6月）
- ② 短期大学部2年生「こども造形の基礎Ⅰ」にて鈴鹿・伊勢鉄道をテーマに中瀬古駅舎の壁面構成を制作（5月～6月）
看板犬の制作・プラダンボール黒板の制作、メッセージボードの活用（7月）
- ③ 中瀬古駅の展示（7月～8月）
- ④ オープンキャンパスにて伊勢鉄道車両を貸し切り、イベント（コンサート・授業）を実施（7月）

その他、12月にフランス人留学生と本学職員による電子ピアノ&アコーディオンコンサートを中瀬古駅前で行いました。



■今後の計画

引き続き、駅舎を使ったイベント開催など、大学の講義や行事などと連動した内容を検討していきます。現在は、伊勢鉄道をテーマにした視聴覚教材（絵本・紙芝居）の制作を進めています。

■担当者

担当 こども教育学部 幼児教育学専攻 大久保 友加里、上田 慎二

連絡先 メール ohkuboy@suzuka-jc.ac.jp

駅④ 御浜町道の駅パーク七里御浜 特産品開発&献立開発

■活動の目的と経緯

2018年度から、国土交通省紀勢国道事務所の働きかけにより、道の駅パーク七里御浜（御浜町）において商品開発および販売の活動ができるようになりました。御浜町は、1年中みかんが採れる地域であり、これをPRし、「ここでしか買えない、食べられない」特長を出していきたいと考えています。パーク七里御浜では、辻製油株式会社がみかんジュース等を製造していますが、果汁やその副産物であるみかんの皮の活用について、本学が協力することで意見がまとまっています。学生の視点を生かし、魅力ある商品の開発を検討しています。

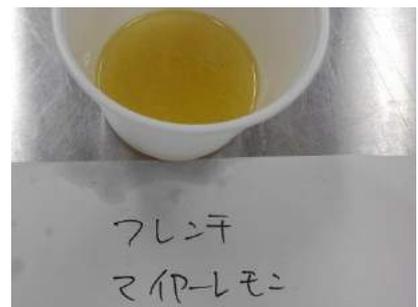
■活動内容と実績

クッキング同好会 Tomato と食物栄養学専攻2年生により、みかんを使った商品および献立の提案を行いました。

5月、みかん果汁またはみかん果皮パウダーを使って、考案したレシピの試作を行いました。あらかじめ募ったパーク七里御浜で食べることができる料理、スイーツの提案品のなかから、代表となった8品を試作し、プレゼンおよび試食後、最もよいと思う品に投票を行いました。投票結果は美味しさ重視であり、新しさや独自性はあまり重視されていないようでしたので、目新しい一品を作るうえでは、今後の検討が必要だと感じました。

その後、みかん果皮パウダーはみかんの収穫時期により味にぶれが生じるという報告が辻製油株式会社開発部よりあったため、パウダーの製品使用はまだ難しいと判断し、品質的に安定している果汁で商品開発を行っていくことにしました。

6月、果汁を使用した商品案として12品提案したところ、すでに実績のあるドレッシングが一番進めやすいということで、各種果汁を使ったドレッシングを制作することで方向性が決まりました。温州・セミノール・マイヤーレモン・紅甘夏の4果汁を使用し試作した結果、それぞれの果汁の特徴がつかめました。今後は、各果汁のよさを引き出す味の調整を行っていきます。



■今後の計画

引き続きドレッシングの開発を進めていきます。また、パーク七里御浜でのみかんアイスクリームの販売など、そこでしか食べられない商品の提案も進めていくことになっています。

■担当者

担当 短期大学部 食物栄養学専攻 乾 陽子

連絡先 メール inuiy@suzuka-jc.ac.jp

駅⑤ 紀宝町ウミガメ公園 店舗活性化事業

■活動の目的と経緯

本学では、国土交通省全国「道の駅」連絡会と連携協定を結んでいることから、駅プロジェクトでは道の駅などの産直施設の活性化にも取り組んでいます。三重県の最南端「紀宝町」には道の駅「ウミガメ公園」道の駅があり、鈴鹿大学国際人間科学部のビジネス基盤・観光ビジネスのゼミナール単位でも、外国語看板の制作などに取り組んだ実績があります。

2018年度については、「駅プロ」として全学を挙げて取り組めることとなり、株式会社鈴りん探偵舎および短期大学部食物栄養学専攻前澤ゼミ（駅⑥参照）にて、ウミガメ公園活性化に取り組むことになりました。

■活動内容と実績

数回の打ち合わせを経て、紀宝町役場にて事業予算を組んでいただけることになり、株式会社鈴りん探偵舎の学生たちが、以下のような利用者拡大のための方策を企画・実践しました。また、実施に当たっては国土交通省および紀宝町から、デザイン企画・制作に当たっては、デザイン会社のOI企画室および有限会社アップロードから全面的にご協力いただきました（紀宝町にお立ち寄りの際は、学生が作ったPOPやパッケージをぜひご覧ください）。

- ① 調査合宿の実施：みかん農家・野菜農家・米農家の3か所にヒアリング調査
- ② 大学祭での物産PR：紀宝町特産品「飛雪米」の試食&アンケートの実施
- ③ 店内POPの制作：生産者の顔を前面に出したPOP、みかんの試食を促すPOPなど
- ④ 飛雪米「小分け」パッケージの企画制作：買い求めやすいサイズの提案とパッケージデザイン
- ⑤ 飛雪米「赤ちゃん米」の企画：新生児の顔を入れた記念品の企画提案
- ⑥ ウミガメ公園でのイベント企画：紀宝町版カラーラン「カメーラン」の企画提案
- ⑦ ウミガメ公園ポスターの制作：上記の活動写真を使ったウミガメ公園PRポスターの制作
- ⑧ 報告会の実施：中間報告と最終報告を紀宝町にて実施



■今後の計画

制作したポスターは、県内各地の道の駅などに掲示される予定です。また、企画イベントの実施可能性や補助金活用など検討を進め、紀宝町の関係者の皆さまと新規事業を調整していきます。

■担当者

担当 国際人間科学部 高見啓一（株式会社鈴りん探偵舎 代表取締役）

連絡先 メール info@machi-rmc.com

駅⑥ 紀宝町ウミガメ公園 献立開発（亀巻き寿司ほか）

■活動の目的と経緯

活動の経緯は〔駅⑤ 紀宝町ウミガメ公園 店舗活性化事業〕と同様です。短期大学部食物栄養学専攻前澤ゼミは、紀宝町ウミガメ公園の活性化の手助けになるよう紀宝町の特産品を使用し、一汁三菜を基本としたメニューの提案をしました。また、実際の店舗にメニュー提案を行うという取り組みを通して、学生たちに実践力を高めてもらうことも目的の一つです。

■活動内容と実績

紀宝町ウミガメ公園との打合せでいくつか挙がった要望の中から「紀宝定食みたいなものができるのであれば嬉しい」を選択し、紀宝定食の提案をすることになりました。紀宝定食の基本コンセプトとして、「一汁三菜を基本とし、栄養バランスにも配慮する」、「紀宝町の特産品を使用する」としました。また、可能な限りウミガメをモチーフにしたものを入れることにしました。

10月10日中間発表会にて学生が考えた紀宝定食の発表を行いました。提案4の「亀ちゃん寿司」の献立が高評価で、亀ちゃん寿司単品での販売に向けて検討していくことになりました。

紀宝定食としては採用されませんでした。学生が提案した献立の一つを気に入っていただき、実際に販売までできるようになったことは、学生たちにとって大きな自信につながったと感じます。



学生が提案した紀宝定食献立

	提案1	提案2	提案3	提案4
メニュー	ごはん 唐揚げの和風おろしポン酢 (マイヤーレモン使用) 野菜サラダ 豆腐とわかめの味噌汁	鯖の炊き込みご飯 豆腐ハンバーグ和風ポン酢 (マイヤーレモン使用) 小松菜としめじのお浸し とろろ昆布のすまし汁	うみがめのオムライス しらすサラダ 野菜スープ みかんゼリー	亀ちゃん寿司 車麩のフライ 煮物 冷奴 蛤の潮汁
使用特産品	マイヤーレモン	マイヤーレモン	釜揚げしらす みかん	マイヤーレモン
エネルギー 食塩相当量	811kcal 2.6g	735kcal 3.1g	738kcal 3.3g	645kcal 3.0g

■今後の計画

亀ちゃん寿司を、ウミガメ公園 1 階特産品販売コーナーにて期間限定販売する予定です。

■担当者

担 当 短期大学部 食物栄養学専攻 前澤いすず

連絡先 こども教育学部 仲 律子 naka@m.suzuka-iu.ac.jp

駅⑦ ネコギギプロジェクト

■活動の目的と経緯

国の天然記念物「ネコギギ」は、伊勢湾と三河湾に注ぐ川にしか生息していない貴重な水生生物です。グループ校である鈴鹿高等学校（学校法人鈴鹿享栄学園）の自然科学部では、2004年から独自に生息調査を行っており、亀山市との協定のもと学校内での飼育を行い、繁殖に成功しています。この成果が高く評価され、環境大臣賞を受賞しました。

本学としてもネコギギの存在を世間に広く知ってもらうべく、1年生「初年次セミナー」にてネコギギの普及啓発活動に取り組むこととなりました。特に、3年生のビジネスマネジメント系ではグッズ開発などに取り組んでいることから、1年生のうちから製品企画やプロモーションの基本を学ぶ教材としてネコギギを題材とすることになりました。

■活動内容と実績

ネコギギの生態やパッケージデザインの基本について学びとともに、学生たちでグッズやパッケージの案を検討しました。

①ネコギギについての基本知識の習得

鈴鹿高等学校自然科学部の資料などを用いながら、ネコギギの基本的な知識や特徴などについて学習しました。

②ネコギギグッズの企画

三重県総合博物館 Mie Mu にて、グッズ売場の状況やニーズ調査を行いました。調査結果をもとに学生たちとどのようなグッズを企画したいかを検討しました。

③プロダクトデザインの基本について学ぶ

絶滅危惧種のデザインをモチーフにしたプロダクトデザインに取り組んでいる株式会社インパクトたきの指導のもと、キャラクターデザインの基本を学びました。

④ネコギギグッズパッケージの企画

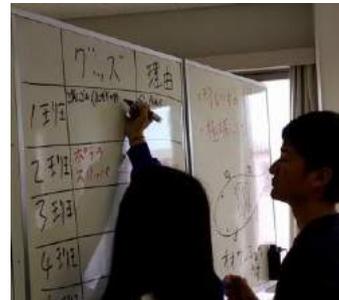
株式会社安全との協議のもと、お菓子（団子を予定）を制作することになり、学生たちでパッケージの案を検討しました。

⑤大学祭での「ネコギギグッズパッケージ総選挙」の開催

大学祭にてネコギギの生態パネルとともに、学生たちが考えたパッケージ案を企画展示し、「投票」を行いました。



皆さんのすぐそばでもネコギギが静かに暮らしています。
豊かな自然環境が、ネコギギを守ります。
なぜネコギギが大変なのか説明します。



■今後の計画

大学祭来場者からの人気が高かったデザイン案をもとに、株式会社インパクトたきや株式会社安全と調整しながらグッズの制作販売に向けて進めていきます。

■担当者

担当 国際人間科学部 高見啓一（株式会社鈴りん探偵舎 代表取締役）

連絡先 メール info@machi-rmc.com

駅⑧ 鈴鹿抹茶ブランド化事業

■活動の目的と経緯

「鈴鹿抹茶」は、緑濃い鈴鹿山脈の伏流水で育った鈴鹿の茶葉から作られ、全国第3位の生産量を誇る三重県のお茶です。

鈴鹿大学では、「鈴鹿学」の授業で、太門通商、AGF 鈴鹿、そして鈴鹿市による鈴鹿抹茶の取組をテーマに学んできました。さらに、お話を聞くだけでなく、地域の特産品を通じて、学生自らが、地域の方々と鈴鹿抹茶ブランド化のための活動をするようになりました。

■活動内容と実績

①太門通商から鈴鹿抹茶の特色や地域活性化についてお話しいただきました。

②AGF 鈴鹿からも、コーヒーだけでなく、地域貢献として鈴鹿抹茶を使った製品を発売していることなどのお話を聞きました。

③大学祭で鈴鹿抹茶PRに取組むことになりました。

富本ゼミでは、キッチンカーで抹茶オーレなどを販売しました。

さくら茶道部は、鈴鹿抹茶の提供を受け、抹茶パックラベルコンテストを実施することになりました。ラベルコンテストの優秀作品は、商品化されることになりました。

④さくら茶道部は、その後も、台湾の啟英高等学校訪問時に、鈴鹿抹茶を使ったおもてなしを実施し、大学外にも鈴鹿抹茶をPRすることができました。

この活動を通じて、学生の学びの成果としては、以下のことが挙げられます。

「鈴鹿抹茶という地域資源についての知識・情報を得ることができた」、「AGF 鈴鹿・太門通商という地域の企業の方から、製品開発、PR方法、販売方法などを学んだ」、「鈴鹿抹茶を学内、地域の方々にアピールすることができた」、「クラブ活動、ゼミ活動として多様な学生が協働で活動することができ、交流が広まった」、「ラベルコンテストの作品が商品化された」などが成果として考えられます。



■今後の計画

引き続き大学の講義や行事などと連動した鈴鹿抹茶のブランド化のためのPRを行っていくほか、学外の方との交流を深めながら活動を続けていく予定です。

■担当者

担当 国際人間科学部 富本真理子

連絡先 メール tomimotom@m.suzuka-iu.ac.jp

駅◎ 観光プロモーション動画事業

■活動の目的と経緯

三重県菟野町は、1,300年の歴史を誇る湯の山温泉や、鈴鹿山脈の主峰をなす標高1,212mの御在所岳を有す、人口約4万人の自然豊かな町です。今年度、第4回目となる菟野町主催の菟野町観光プロモーションビデオコンテストに初めて、三重県内の大学として参加しました。

■活動内容と実績

観光ゼミの有志を中心に2チームが参加表明、それぞれの個性を活かした活動内容となりました。社会人学生や学外の方などにアドバイスや技術面でのサポートを受けながら、学生たちの自主的な活動として取り組みました。菟野町から、事前準備としてフィールドワークの機会が提供され、主な名所を案内していただきながら、イメージを膨らませていきました。各チームで、自主的に、スケジュール調整、台本作成、小道具準備、ロケ依頼などの準備を行い、撮影を行いました。規定の3分という時間に収めるためには、その何倍もの長さが必要で、その後の編集も想像以上の労力を費やしました。

12月1日に実施された愛知淑徳大学での発表会では、他大学の参加者の前で、作品紹介等のプレゼン後、上映するという大きな経験もできました。初参加でしたが、鈴鹿大学の存在感はアピールできたと思います。

この活動を通じて、学生の学びの成果としては、「苦勞して作品を制作する過程で、留学生や社会人学生を含めた幅広いつながりが生まれたこと」、「各学生たちが、通常では知りえなかった才能を発揮できたこと」、「留学生や野球部といった、多様な学生たちが主体的に取り組む機会になったこと」、「菟野町の方々にも撮影過程でお世話になり、地方の魅力を感じるようになったこと」、「他大学の学生と交流することができ、刺激を受けたこと」などが挙げられます。

なお、完成した動画は、菟野町のホームページに掲載されています。



■今後の計画

次年度もこのコンテストは継続されると聞いていますので、学生たちも参加したいと考えています。今年度の経験を活かして作品のレベル向上を目指したいと考えます。

■担当者

担当 国際人間科学部 富本真理子

連絡先 メール tomimotom@m.suzuka-iu.ac.jp

駅⑩ 学生によるウェブマガジン事業～to me motto!～

■活動の目的と経緯

地方にもインバウンド訪日外国人を積極的に誘致する時代になりました。また、観光の目的も多様化しており、従来型の有名な観光地巡りや爆買いから、体験や、交流というニーズもあります。「暮らすように旅する」ということで、地域の人々の生活情報は、訪日外国人観光客にとって、魅力的な情報になってきています。そこで、外国人学生が多いという鈴鹿大学の特徴を活かし、三重県の生活情報を多言語で、発信することになりました。

活動の目的は、①生活情報/観光情報の発信方法、②ウェブサイトの運営方法、③三重県のインバウンド振興と多文化共生社会実現のための地域貢献を、本事業を通して学ぶことです。

■活動内容と実績

①IT 特別顧問として、津市美里町でガソリンスタンド経営の傍ら、IT を通じた生活の向上や地域活性化を目指したセミナーを開催している稲垣博文氏を、4 月から月に 1 回お招きして、勉強会を重ねてきました。

②仮サイトをオープンして投稿する練習をしました。

③ゼミ以外でも観光の授業の成果として、学生たちから記事を集め掲載しました。

④サイトをオープンして、アクセスの解析をしました。

この活動を通じた学生の学びの成果として、「ウェブサイトの仕組みや、運営方法についての理解が進んだ」、「実際にウェブサイトに適切に投稿することができるようになった」、「外部講師から多様な生き方について学ぶことができ、交流が深まった」などが挙げられます。



■今後の計画

引き続き大学のゼミや講義で、ウェブによる発信方法を学び、実際に学生たちが県内のフィールドワークをすることを奨励しながら、情報量を増やす活動を行います。また、スポンサーを募ったり、行政とのコラボレーションをしたりすることが目標です。

■担当者

担 当 国際人間科学部 富本真理子

連絡先 メール tomimotom@m.suzuka-iu.ac.jp

駅⑪ インバウンド対応（翻訳事業など）

■活動の目的と経緯

現在は三重県においてもクルーズ船寄港地となるなど、インバウンドが活発になっています。インバウンド受け入れのための言語をはじめとする体制整備はもちろんのこと、前提となる外国人のニーズに合わせたコンテンツの発見や研鑽・発信が求められます。

この点において、10か国を超える学生が在籍する多国籍キャンパスであることは、本学の強みとなっています。経済成長著しい中国やベトナムなどからの留学生が多数在籍していることから、彼らの視点やノウハウを生かした連携事業の打診は後を絶ちません。留学生によるインバウンド支援を本学の強みとし、駅プロにおいてもそのノウハウを遺憾なく発揮しております。

■活動内容と実績

大学発ベンチャーや観光ビジネス系のゼミでは、留学生の能力を生かし、以下のようなサービスを県内企業や行政などに提案・提供しています。

また、このような事業に関わった学生の中から、「三重県私費留学生奨学金」や「ロータリー米山奨学金」などの奨学金が生まれていることは、大きな実績といえます。「企業・行政の発展」と「学生の育ち」の双方を実現する駅プロらしい事業といえるでしょう。

①ミステリーショッパー調査やモニター調査の提供

外国人の視点を生かしたショッピングセンターの覆面調査や、観光地モニター調査など

②行政や企業のパンフレット・POPなどの翻訳サービス

度会茶パンフレット、国土交通省通行止めチラシ、中国人向けドラッグストアPOPなど

③その他 海外展開を希望する企業等へのコンサルティング提供

中国進出企業、ベトナム進出企業などの事業を支援しています。



■今後の計画

現在新たに、本学と宮古島市との連携協定が進められており、宮古島の新空港活性化や周辺観光施設におけるインバウンド対応が求められていることから、留学生の視点からの駅プロ提供について模索していきます。

■担当者

担当 国際人間科学部 高見啓一（株式会社鈴りん探偵舎 代表取締役）

連絡先 メール info@machi-rmc.com

駅⑫ 高大接続事業

■活動の目的と経緯

TSUNAGU プロジェクトのポイントは、各学部・学科の「強み」や「特色」を生かせる点にあります。その結果が鈴鹿大学の「ブランディング」につながっており、入試広報の観点からも、本学のターゲットである高等学校へのアピールや高大接続事業が実現できています。

■活動内容と実績

県内の高校生・高校教諭・学校長に対し、本学の魅力を発信する機会が、次々と生まれています。実際に 2019 年度入試では、駅プロやベンチャーの活動を志望する生徒が複数人志願しています。

①高等学校向け模擬授業・ガイダンスでの「駅プロ体験」の実施【亀山高校・四郷高校など随時】

株式会社鈴りん探偵舎の大学生が「講師」となって、高校生たちと地域の課題解決ワークを行いました。身近な存在である大学生によるワークは、高校生たちにも好評でした。

②三重県商業教育研究会【年間6回】・三重県商業教育研究大会【8月10日】

三重県内の商業科教諭とともにアクティブラーニングの実践方法について研究を進めています。商業科教員が一堂に会する研究大会では TSUNAGU プロジェクトの取り組みについて紹介しました。

③日本商業教育学会【8月18日】

全国の商業科教諭や研究者が集まる学会が本学にて開催され、基調講演にて駅プロおよび大学発ベンチャーの取り組みについて発表しました。

④東海4県全商校長会【1月22日】

愛知・岐阜・三重・静岡の高等学校長が集まる研修会にて、駅プロを紹介したほか、株式会社鈴りん探偵舎の学生たちが現在までの取り組みを発表しました。

⑤未来を拓く職業人育成事業研修会【2月1日】

表記補助事業のもと地域活動に取り組んでいる高等学校教諭に向けて、TSUNAGU プロジェクトを例に、地域・企業との連携の方法についてレクチャーしました。



■今後の計画

上記活動をきっかけに、県内の複数の高等学校から「高大接続で公共交通活性化に取り組みたい」「高校生に指導をしてほしい」といった打診がありました。入試広報の観点からも 2019 年度の重点事業として、この成果を TSUNAGU プロジェクト型入試などのアウトプットにつないでいきます。

■担当者

担当 国際人間科学部 高見啓一（株式会社鈴りん探偵舎 代表取締役）

連絡先 メール info@machi-rmc.com

育ち① すずたん広場

■活動の目的と経緯

すずたん広場は、2014年度から本学主催の子育て支援活動として、地域に貢献するとともに、その活動を教育や研究につなげることを目的に開設しました。「参加者みんなでつくる広場」を合言葉に、参加の親子、学生、教員、広場スタッフが、温かみのある交流を通してつながり、子育てについて語り、学び合う場づくりになることを願ってきました。また将来、保育者や幼児教育者を目指す学生が中心となって「計画を立案する」、「部屋の装飾や手作りみやげなどの準備をする」、「仲間と支え合いながら活動を実践する」、「学生、教員、スタッフが一緒に振り返りを行う」など、体験を通して協働することの意義を学ぶことができました。こうした一連の教育活動の場は、学生にとっても教員にとっても学びを深める貴重な機会となっています。

2017年度からはプレイルームが新設され、環境が整ったことで子どもの遊びが広がり、親同士の自発的な交流が活発になりました。腹話術人形や絵本の読み聞かせなどの地域のボランティアとの交流も実現し、地域に根ざした広場として育ちつつあることを実感しています。

■活動内容と実績

開催期間：2018年5月16日～7月18日、10月3日～12月19日の毎週水曜日

リトミックは5月14日、6月11日、7月9日、10月1日、11月12日開催

時間帯：通常の広場は、9：45～11：30（学生は12：10まで）

リトミックは、10：15～11：00

開催回数：通常の広場22回。親子でリトミック5回

参加人数：通常広場、リトミック合わせて310組 延べ664名の参加

学生は、年間を通して100名以上が参加

参加費：通常の広場は、保険料として1組100円徴収

（きょうだいは1人50円追加）

リトミックは、親子1組500円徴収

開催場所：鈴鹿大学I棟プレイルーム（I103）

対象：未就園児親子、定員15組

広報：鈴鹿市広報、本学ホームページ、チラシ配布など



親子でリトミック



学生と一緒に製作活動



腹話術人形のボランティアと交流

すすたん広場は、水曜日に開催する通常の広場と年間5回開催の「親子でリトミック」教室があります。リトミックの教室は、勝井由紀インストラクターの指導のもと、1～5歳と幅広い年齢の子どもたちがふれあい、親子と一緒に音やリズムを全身で感じ取りながら楽しさを共有することを大切にしています。

通常広場のプログラムは、大きく3つの柱があります。1つ目は、「遊び場の提供」です。好きな遊具や遊びを見つけ「自由に遊ぶ活動」と手遊びや絵本、造形活動、ふれあい遊びなど、参加者みんなで「一緒に楽しむ活動」です。2つ目は、「ミニ講座」です。本学の教員が講師を務め、それぞれの専門性を生かして子育てに関連した講義内容を提供しています。また、音楽教員によるコンサートは、「本物の音楽にふれることができる癒しのひと時」との声をいただき好評です。3つ目は、「子育て相談」です。日頃の悩みや気にかかることなどを気軽に話せる雰囲気づくりに努め、子どもの発達や特性を踏まえて具体的なアドバイスができるように心がけてきました。親同士が情報交換をする「語ろう会」の機会も貴重な子育て相談の場でした。

学生の休憩室（ほっとルーム）を活用して始まった「すすたん広場」ですが、2018年度をもって一区切りを迎えることになりました。5年間という長きにわたり、広場も学生も地域の参加親子に育てていただいたとの思いを強くしています。すすたん広場をご利用下さった親子に心から感謝申し上げます。

最後に、開設当初から子育てコーディネーターとして、終始誠実にご対応いただき、学生の育成に対しても温かいまなざしを注ぎ続けてくださった鈴木壽真子氏、萩野眞知子氏のお二人に深く感謝いたします。

■今後の計画

すすたん広場は、鈴鹿大学短期大学部の「鈴短」が名称の由来となり、開設以来、地域の方々に親しまれてきました。今年度は鈴鹿大学と鈴鹿大学短期大学部が共同し、学園全体で取り組むTSUNAGUプロジェクトの一環として広場が開催されました。このことを契機として、2019年度から広場の名称を「あそび広場 すずちゃん」に変更することとなりました。また、実施日も水曜日から月曜日に移動します。「あそび広場 すずちゃん」が、地域と本学をつなぐ温かい交流の場、学びの場となるよう活動していきたいと思っております。

■担当者

担当 短期大学部 こども学専攻 小島佳子

連絡先 メール hiroba@suzuka-jc.ac.jp



育ち② すずたん広場～ブラジルと日本の親子のおはなしと遊びの会

■活動の目的と経緯

すずたん広場は、子育て親子の交流、子育てなどに関する相談・助言を行うことで、親の安心感を醸成し、安心・安全のもとで子どもが育つ環境を作ることを目的として、実施してきました。

これまでは主に日本人の親子を対象にしてきましたが、2018年度から初めてポルトガル語圏の親子を対象としたすずたん広場を実施しました。“地域の中の「世界」を見つめる”という多文化共生をテーマとしている本学園としては、外国につながる親子を対象とした子育て支援にも取り組みたいと考え、国際人間科学部の学生にも参加してもらいました。

■活動内容と実績

日時：2018年10月24日（水）9：45～11：30

場所：鈴鹿大学1棟プレイルーム（1103） 参加費：親子1組100円（保険代含む）

対象：ポルトガル語圏親子と日本人親子

内容：ポルトガル語圏の学生による歌や遊び、馬場まゆみ氏によるミニ講座

協力：公益社団法人三重県国際交流財団（MIEF）、国際子育てサロンFunFunサロン

広報：ポータル三重、MIEFホームページ・Facebookでの告知、チラシ配布など

この日は、ポルトガル語と日本語の両方が堪能な、国際人間科学部4年生の2名の学生が短期大学の教員のアシスタントを務めました。彼らは、みんなで一緒にポルトガル語で歌えるように、簡単なポルトガル語を教えてくれたり、絵本を読んだりしてくれました。日本の子どもも、ブラジル出身の子どもも、みんな楽しそうに和気藹々と和やかでやさしい時間を過ごしました。

また、ミニ講座では、ブラジル出身で3児の母親でもある馬場まゆみ氏に、ブラジルと日本の子育ての違いやブラジルの子育て環境などについて、貴重なお話を伺いました。

次の機会にも、たくさんの外国につながる親子に遊びに来てもらえたら嬉しく思います。



■今後の計画

すずたん広場が「あそび広場 すずちゃん」に名称変更し、実施日も月曜日に移動するため、本事業も「あそび広場 すずちゃん」の一環として、後期授業中の祝日の月曜日に実施する予定です。

■担当者

担当 国際人間科学部 棧敷まゆみ

連絡先 メール sanjiki@m.suzuka-iu.ac.jp

育ち③ すずかだいがく こどもひろば

■活動の目的と経緯

すずかだいがくこどもひろばは、本学学生が提供する遊びやし物、製作活動に就学前のおさまが参加することで、それらを自分なりに楽しみ、表現する心を育てることを目的としました。また、学生と親子のふれあいの中でリラックスできる時間を過ごし、親子関係が一層温かなものになることを目指して行われました。さらに、保育者・幼児教育者を目指す学生が、授業計画から準備、実践、振り返りまでを体験し、実践力を身につけるといった教育的意義をねらいとしたイベントでした。

■活動内容と実績

日時：2018年8月4日（土）10:00～12:00

場所：鈴鹿大学I棟プレイルーム（I103） 参加費：無料

主催：鈴鹿大学こども教育学部幼児教育学専攻（2年生・教員）

対象：未就学児とその家族約20数組40名程度、オープンキャンパス参加者18名が見学

内容：手遊びと絵本・パネルシアターなどの出し物、製作コーナー、自由遊び

広報：本学ホームページ・SNSでの告知、ケーブルテレビでの告知、チラシ配布など



開催に当たっては、基礎ゼミナールⅢ（前期水曜2限）の授業の中で計画や練習、壁面製作などの準備を進めたほか、保育の実践系の授業での取り組み（パネルシアターや手遊びの実践）を生かしました。当日は学生3グループが、手遊びと絵本・パネルシアターなどの出し物を行いました。また、オリジナルの缶バッジ、うちわの製作コーナーも設置しました。予想よりも多くの方にご来場いただき、プレイルームがとてにぎやかになりました。そのため、少し窮屈に感じられた方もいたかもしれませんが、学生が出し物を行った際に、手遊びや絵本に興味をもち、学生の問いかけにも声を発して参加してくれた子どももいました。短い時間でしたが、楽しいひとときを過ごしていただけたなら、幸いです。学生にとっても、貴重な実践の場になったと思います。

■今後の計画

2019年度から開催される「あそび広場 すずちゃん」に、こども教育学部の学生も参加し、地域の親子の皆さまとのふれあいの機会を持ちます。また、今回と同様にオープンキャンパス開催日にも、お子様向けのイベントを開催する予定です。

■担当者

担当 こども教育学部 幼児教育学専攻 中山 真、坪井 守、大久保友加里

連絡先 こども教育学部 仲 律子 naka@m.suzuka-iu.ac.jp

育ち④ 大学アスリートへの栄養教育

■活動の目的と経緯

短期大学部のスポーツ栄養サポート研究会 Grow up に所属する学生が講師となり、鈴鹿大学の運動部に所属する学生に向けて栄養教育を行いました。アスリートが必要な栄養・食の知識を学ぶことで、自らが健全な食生活を実践し、理想的なからだ作りができるようになり、競技技術向上につなげることを目的としています。また、スポーツ栄養サポート研究会 Grow up に所属する学生自らが講座運営をする経験を通して実践力を高めることも目的の一つとしています。

2018年度は、鈴鹿大学硬式野球部に所属する学生を対象に栄養教育を行いました。

■活動内容と実績

実施日：6月6日、7月4日、7月11日、7月18日 18:00~18:30

対象者：鈴鹿大学 硬式野球部 79名（内訳 選手 77名、学生スタッフ 2名）

講師：スポーツ栄養サポート研究会 Grow up に所属する学生 14名

講座テーマ：

	グループA（捕手、外野手）	グループB（投手）	グループC（内野手）
6月6日（水）	アスリートの基本的な食事の形	アスリートの基本的な食事の形	アスリートの基本的な食事の形
7月4日（水）	疲れにくくなる補食の摂り方	筋力を増やす食事	プロテインの有効活用
7月11日（水）	筋力を増やす食事	プロテインの有効活用	疲れにくくなる補食の摂り方
7月18日（水）	プロテインの有効活用	疲れにくくなる補食の摂り方	筋力を増やす食事

Grow up に所属する短期大学部2年生を中心に講座全体の方針を決め計画し、講座テーマごとに担当者を決定しました。担当者の組分けは1、2年生混合にし、各講座テーマは2年生がリーダーとなり、講座で使用するスライドや資料の作成、そして講座当日の運営を行いました。内容をわかりやすく伝えるためにスライドを工夫したり、対象者を飽きさせないためにクイズを取り入れたりと主体的に取り組むことができていました。

硬式野球部の学生たちに4回の講座終了後にアンケートを実施しました。アンケートに回答した人の約9割が、「講座の内容は今後の自分にとってプラスになると感じた」と回答しました。また約9割が「以前より食事に気をつけるようになった」と回答し、その内約7割が「練習前に水分補給と補食（炭水化物が補える食品）を食べるように気をつけている」、約8割が「副菜（野菜を使ったおかず）を食べるように気をつけている」と回答しました。自らが健全な食生活を実践していく第一歩になったと推測します。



■今後の計画

次年度も、鈴鹿大学の運動部に所属する学生に向けて、アスリートに必要な栄養や食事についての情報を提供したいと考えています。

■担当者

担当 短期大学部 食物栄養学専攻 前澤いすず

連絡先 こども教育学部 仲 律子 naka@m.suzuka-iu.ac.jp

育ち⑤ ジュニアアスリートへの栄養&ケガの予防教育

■活動の目的と経緯

2020年に東京オリンピック・パラリンピックが行われます。スポーツへの機運が盛り上がるなか、ジュニアアスリートの育成にも注目が集まっています。ジュニア期は、アスリートとして活躍する準備期であり、この時期に身体や運動能力の基礎を固めておくことが重要です。そこで、競技技術とともにジュニアアスリートに必要な栄養・食の知識、そしてケガ予防の知識を習得してもらうことを目的として講座を行いました。

■活動内容と実績

実施日：12月1日（土） 10：00～14：00

場 所：鈴鹿大学（体育館、学生食堂、ランチルーム）

対象者：県内のバレーボール部に所属する小中学生と保護者、指導者 35名

後 援：三重県学生バレーボール連盟

講座内容：講座①「バレーボール教室」講師：女子バレーボール部

講座②「食事の基本と栄養について」講師：スポーツ栄養サポート研究会 Grow up

講座③「捻挫(ねんざ)ってなに??」講師：石川拓次 准教授

午前中は女子バレーボール部 新監督のもと大学生の選手と一緒に[バレーボール教室]、お昼は Grow up の学生がメニューを考えた昼食を食べながら[食事の基本と栄養]についてのお話、午後は、石川拓次准教授による[捻挫時の応急処置と予防法]について行いました。参加者からは、「バレーが楽しかった」、「栄養について学べたので良かった」、「こういうプロジェクトが毎年あったらいいな」などといった好意的な感想がありました。



Grow up では2年生が昼食メニューの検討を行い、1年生は[食事の基本と栄養]の資料作りと当日講師として参加者に講話を行いました。1年生は知識・経験とも未熟ではありますが、一生懸命に取り組んでいました。6、7月に行った大学アスリートへの栄養教育で2年生のアシスタント役として取り組んだ経験は、今回の講座に挑むモチベーションのアップにつながっているように感じました。講師として参加者の前で話をした学生は「とても緊張したけれど、こどもたちが興味をもって話を聞いてくれたので嬉しかった」と今回の経験は自信につながったようでした。



■今後の計画

来年度も小学生または中学生の運動部に所属する選手に向けて、栄養・食の知識、そしてケガ予防の知識についての情報を提供したいと考えています。

■担当者

担 当 短期大学部 前澤いすず、石川拓次

連絡先 こども教育学部 仲 律子 naka@m.suzuka-iu.ac.jp

育ち⑥ 性教育出前授業

■活動の目的と経緯

このプロジェクトは出前授業を通して、養護教諭を目指す学生と児童生徒のそれぞれの育ちをつなげていくことを活動の目的としています。学生の育ちとして、養護教諭を目指す学生が学校現場に向き、授業計画から準備、実践、振り返りまでを体験し、実践力を身につけることを目指しています。こどもの育ちとして、性に関する授業を通して、自分が生まれてきたことの奇跡、命の大切さを学ぶ生の授業として、自分を大切にできる心を育てること、またそこから家族に対する感謝の気持ちや、友達を含めた他者も大切にできる心につなげていくことを目指しています。

■活動内容と実績

日 時：2018年7月12日（木）10：35～11：20

場 所：三重県玉城町立有田小学校

対 象：3年生児童 31名

実施者：鈴鹿大学こども教育学部養護教育学専攻2年生 10名

「命の大切さを知ろう」というテーマで45分の授業を実施しました。学生10名がそれぞれに授業での役割を担って講義を実践し、赤ちゃん抱っこ体験を通して児童と交流しました。学生からは「積極的に取り組むことができた」、「グループでの赤ちゃん抱っこ体験の際には自分から声をかけてみんなが楽しく学べるように心がけた」、「将来のためにもこれからもこういう機会があれば積極的に参加したい」などの感想がありました。また児童からは、「私は赤ちゃんの命も大切に、自分も大切にだと思いました」、「3つのキーワードを知ることができました。①自分を大切に、②みんなを大切に、③かんしゃの気持ちを持とう。それぞれをきちんと守りたい」、「いい勉強だったので心に残っています。また大学生の人たちに来てほしいです」などの感想がありました。学生は、授業を実施する大変さを実感するとともに、児童との交流を通じてその手ごたえを感じることができ、教諭を目指すための今後の課題を持つことができた貴重な経験でした。



■今後の計画

次年度も、県内の小学校への出前性教育を計画しています。テーマについては要望に応じて授業計画を相談して決めていきたいと考えています。ご希望があれば回数も増やしていく予定です。

■担当者

担 当 こども教育学部 養護教育学専攻 小川 真由子

連絡先 メール ogawam@suzuka-jc.ac.jp

育ち⑦ いのちの教育人形劇「しあわせの種」上演

■活動の目的と経緯

16歳の少年が交通事故に遭い、遺された家族・友人が少年の死を通して、想い、考えた実話をもとにした人形劇を、本学のこどもボランティア部の学生たちが、いのちの言葉プロジェクトの代表の鷲見三重子氏やご遺族とともに「命の重み」を訴えることを目的としています。

これまで鷲見三重子氏は「いのちの大切さを学ぶ教室」で、県内の中・高・大学生に「命の大切さ」を話してきましたが、小学生にも働きかけたいと人形劇を作りました。その想いに、こどもボランティア部の学生が賛同し、実現した事業です。

■活動内容と実績

日時：2018年5月26日（土）13:00～14:30

場所：東員町総合文化センター2F 講習室

対象：東員町民ほか 約100名

実施者：こどもボランティア部の学生と交通事故遺族など

主催：東員町、東員町教育委員会、東員町人権擁護委員会

幼稚園教諭を目指すこども教育学部1年生のこどもボランティア部の北出潤人氏は、「こどもたちに命の重さを伝え、その先につなげていかなければならない。将来の勉強にもなる良い機会をいただきました」と感想を述べていました。

学生たちが実際に交通事故被害者の遺族と共に活動することによって、犯罪被害者らの現状と想いを直接理解することができ、生きたくても生きることができなかった命にどのように向き合えばいいのかを直に学ぶ機会を得ることができました。これは、彼らが教師や保育者になったときに、実感を伴った「いのちの教育」をすることにつながると考えています。



■今後の計画

来年度は、上演回数を増やしたいと考えています。大学の近隣にある小学校で、いのちの教育人形劇「しあわせの種」の上演を実施する予定です。

■担当者

担当 こども教育学部 養護教育学専攻 仲 律子

連絡先 メール naka@m.suzuka-iu.ac.jp

育ち⑧ つなぐ育ち事例勉強会～発達～

■活動の目的と経緯

0～22歳のこどもの育ちを支援するための事例勉強会を行いました。こどもと家族をつなぐ、家族と学校や社会をつなぐ、途切れない支援をつなぐ、関係機関をつなぐために、支援者たちが「発達」をテーマにした事例を検討する勉強会を年4回開催しました。わからないことに答えを出す勉強会ではなく、課題を共有し、参加者で課題解決ができるような糸口を見つけていけるような勉強会を目指しています。また、参加者は全員で名刺交換を行い、アットホームな雰囲気グループでの話し合いをすることで、困ったときに助け合えるような顔の見える連携体制を作ることができるように工夫をしています。

■活動内容と実績

日時：2018年5月～11月の奇数月の金曜日 18:00～19:30

場所：鈴鹿大学第2会議室 対象：教育・医療・保健・福祉・労働関係者

- ① 5月11日 話題提供：鈴鹿大学 仲律子教授／事例提供：養護教諭
テーマ「ディスレクシアを背景に持つと考えられる不登校児童の事例」
- ② 7月27日 話題提供：ハローワーク四日市 山崎浩一氏／事例提供：キャリアカウンセラー
テーマ「大学生などの障害者手帳を取得して就職する方法と情報提供のタイミングについて」
- ③ 9月14日 話題提供：鈴鹿大学短期大学部 小島佳子助教／事例提供：保育士
テーマ「イヤなもんはイヤ！！！！」
- ④ 11月16日 話題提供：鈴鹿大学 仲律子教授／事例提供：発達障害者支援センター相談員
テーマ「大学を卒業後就職するが、職場で不応を起し、二次障害を発生したケース」

参加者：①17名、②31名、③20名、④29名

参加者した本学の学生は、実際の事例に当たることで、どのように対応すればよいかを生きた知識として吸収することができました。



■今後の計画

2019年度は、事例勉強会を2回（医療領域、司法領域）、あとの2回は「知能検査と発達支援～WAIS-Ⅲの結果の読み取りを中心に」学ぶ研修会と「精神・発達障害者の雇用について」考えるセミナーを実施したいと考えています。

■担当者

担当 こども教育学部 養護教育学専攻 仲 律子

連絡先 メール naka@m.suzuka-iu.ac.jp

育ち◎ つなぐ育ち事例勉強会～救急処置～

■活動の目的と経緯

事例勉強会の救急処置編として4回開催しました。学校現場での事例をもとにその対応や連携、事後対応などについて情報交換をしました。学校現場では救急処置を要する場面に遭遇することは多くありませんが、事例をもとに対応策を学ぶ機会はとても貴重であると考えます。救急処置の対応の方法は学校によってさまざまであり、学校内での体制をはじめ、家庭や他機関との連携の方法や情報発信についての工夫などを知り、現状改善のヒントを得ることを目的としています。また、学生を含め参加者同士の交流によって横のつながりを広めるための重要な機会となっています。

■活動内容と実績

日時：2018年6月～2月の偶数月の金曜日 18:00～19:30

場所：鈴鹿大学看護実習室（C202）

対象：教育・医療・保健・福祉関係者

- ① 6月8日 事例提供者：朝明高等学校養護助教諭 引田郁美先生
テーマ「様々な過呼吸症状の訴えと対応」
- ② 8月10日 事例提供者：久居農林高等学校養護助教諭 前田香穂里先生
テーマ「アナフィラキシーショックの緊急対応について」
- ③ 10月12日 事例提供者：鈴鹿大学健康管理センター養護助教諭 浜北拙子先生
テーマ「出会った子どもたちから学んだ養護助教諭として大切にしたい事～継続して関わった事例から～」
- ④ 2月8日 事例提供者：玉城町立有田小学校養護助教諭 笠井瑞紀先生
テーマ「学校で起こりやすい感染症についての現状と対策」

参加者：①22名、②26名、③18名、④14名

学校現場でこどもの命を守るために必要なことは何か、こどもの心と体を支えていく職種として求められていることは何かについて改めて考え直す機会となりました。



■今後の計画

次年度は救急処置だけにとどまらず、学校保健に携わる内容全般に幅を広げ、現場の困りごとのニーズや知りたい情報を提供していきたいと考えています。

■担当者

担当 こども教育学部 養護教育学専攻 小川 真由子

連絡先 メール ogawam@suzuka-jc.ac.jp

育ち⑩ 亀山市教育委員会などとの連携事業～つなぐ育ち研修会～

■活動の目的と経緯

2018年3月16日に締結した「亀山市教育委員会と鈴鹿大学との連携に関する協定書」にもとづき、学校および地域における教育の充実・発展に寄与することを目的として、つなぐ育ち研修会の実施をすることになりました。

これは前項のつなぐ育ち事例勉強会の亀山市教育委員会版という位置づけで、現在亀山市教育委員会が行っている研修会をさらに充実させるためのものです。2018年度については、不登校児や発達障がい児等へのライフサイクルを通じた支援について考えてもらうための研修会を実施しました。

■活動内容と実績

①「亀山教育研究会健康教育部研修会」

日 時：2018年8月1日（水）9：00～15：00

場 所：鈴鹿大学看護実習室（C201 教室）

対象者：亀山市養護教諭【10名】

講 師：鈴鹿大学 小川真由子助教

内 容：第1部「フィジカルアセスメントの基礎知識と技術～高機能患者シミュレーターで異常を体験してみよう～」、第2部「たばこがもたらす体への影響について」

②「自分育て、人育て～子どもに背中を見せられる大人であるために～子育てのヒント」

日 時：2018年8月3日（金）13:30～15:30

場 所：亀山市総合保健福祉センター「あいあい」2階大会議室

対象者：保護者、教育関係者、福祉関係者【約120名】

話題提供者：鈴鹿大学 仲律子教授

講 師：小さなコツの専門家、株式会社ラボ代表取締役 野澤卓央氏

トークセッション：仲 律子×野澤卓央氏×酒井友紀子氏（プライムコンサルティング京都支社長）



【野澤卓央氏プロフィール】

小学校6年生から一人暮らし、中学校まで不登校、その後数え切れないほどの挫折・失敗。その体験と、会社経営への成功に導いてくれた師の教えなどを交え、「一生を変えるほんの小さなコツ」を伝授する講演が好評を得ている。2006年に株式会社ラボを設立。

③「社会人として自立するために、ライフステージを通じた支援を考える」

日 時：2018年8月23日（木）を予定していましたが、台風のため中止になりました。

話題提供者：鈴鹿大学 仲律子教授

講 師：四日市市公共職業安定所 職業相談部門 統括職業指導官 山崎浩一氏

■今後の計画

次年度も、亀山市教育委員会からの依頼がありましたので、つなぐ育ち研修会を実施する予定です。

■担当者

担 当 こども教育学部 養護教育学専攻 仲 律子、小川真由子

連絡先 メール naka@m.suzuka-iu.ac.jp

■執筆者一覧

国際人間科学部 榎敷まゆみ、高見啓一、富本真理子

こども教育学部 大久保友加里、小川真由子、上田慎二、中山 真、仲 律子

短期大学部 石川拓次、乾 陽子、小島佳子、前澤いすず

2018年度

TSUNAGU プロジェクト年間報告書

2019年3月5日 発行

監 修 TSUNAGU プロジェクト

発 行 学校法人 享栄学園

鈴鹿大学・鈴鹿大学短期大学部

〒510-0298 三重県鈴鹿市郡山町 663-222

電話 代表 059-372-2121

